放課後児童クラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

稲荷シチタン遺跡

2019

石川県野々市市教育委員会

例　　言

1 本書は、稲荷シチタン遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2 遺跡の所在地は、石川県野々市市稲荷二丁目地内である。
3 調査原因は、御園児童クラブ建設である。
4 調査は社会福祉法人愛里巣福祉会の委託を受けて野々市市教育委員会が実施した。
5 調査に係る費用は社会福祉法人愛里巣福祉会が負担した。
6 現地調査の期間・面積・担当者は以下のとおりである。
　・調査期間 : 平成 30 年 6 月 25 日 ~ 6 月 27 日、調査面積 : 73㎡
　・調査担当者 : 腰地孝大（野々市市教育委員会文化課）
7 出土遺物の整理及び報告書の刊行は平成 30 年度に実施し、腰地が担当した。
8 本書についての凡例は以下のとおりである。
　⑴ 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
　⑵ 水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
　⑶ 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
　⑷ 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
　⑸ 土層図・遺物観察表の色彩注記は、『新版標準土色帖』に拠った。
　⑹ 遺構名称の略号は以下のとおりである。
　　溝 : SD　土坑 : SK
9 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第 1 章 調査の経緯と経過

稲荷シチタン遺跡は、平成 29 年度に分布調査を実施した際に発見された遺跡である。遺跡の西側に位置する三日市ヒガシタンボ遺跡や三日市 A 遺跡で古代北陸道の遺構が発見されていることから、その延長線上にある本遺跡においても同様の遺構が発見されることが予想された。

平成 30 年度に当該地に児童クラブの建設が予定されていたため、平成 29 年度に遺構の確認調査を行ったところ、道路の側溝とみられる溝状の遺構を検出した。石川県教育委員会文化財課及び事業者と協議を行い遺跡の保護に努めたが、建物の建設に伴い遺構が破壊される部分については発掘調査を行うことで事業者と合意した。

平成 30 年 5 月 1 日付教文 65 号で土木工事等のための発掘届を県に進達し、5 月 10 日付の通知で県より発掘調査を行う旨の通知がなされた。直ちに事業者と契約を行い、6 月 25 日に現地調査を開始した。なお、現地調査に当たっては、事前の確認調査において道路遺構の他に顕著な遺構が認められなかったことから、道路の側溝及び路盤面の確認を行うことを主眼として調査区を設定した。調査は 2 日間にわたって実施し、遺構の記録については手実測の他、業者に単点測量を委託した。調査終了後は速やかに事業者に引き渡し、工事が着手されている。

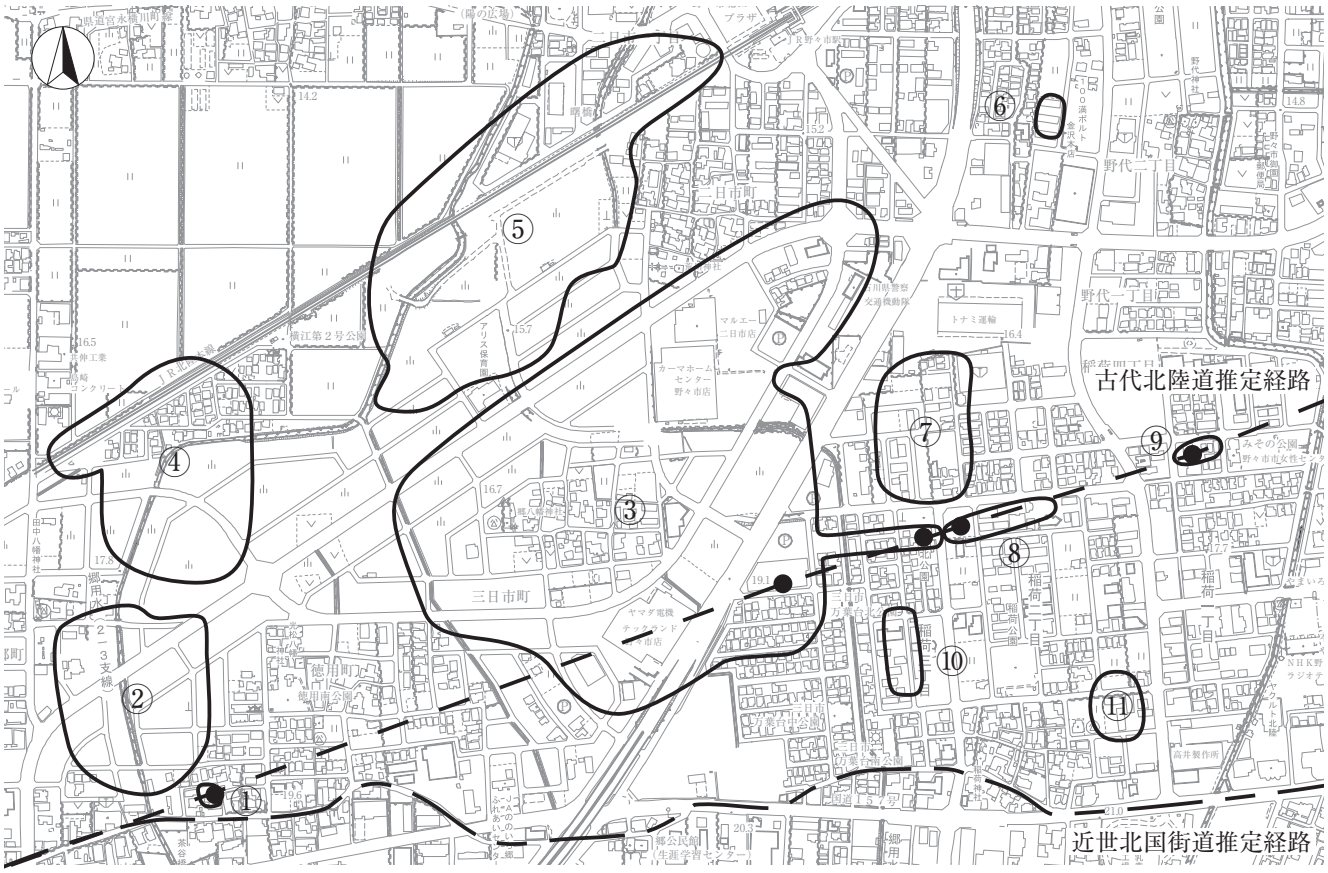
整理作業は同年に実施し、平成 31 年 3 月に報告書を刊行した。

第 2 章 遺跡の位置と環境

野々市市は金沢市と白山市に境界を接する、面積 13㎢ほどの県内で最も狭い市町である。県南部を西流する手取川によって形成された手取川扇状地の扇央部から扇端部にかけて位置しており、比較的平坦な地勢ながら南から北へ緩やかに傾斜しており、市内の最も高い地点で標高 50m、低い地点で標高 10m を測る。

稲荷シチタン遺跡は上記のとおり古代北陸道の推定経路上に位置し、道路の側溝を確認した。そのため、ここでは周辺で同様の遺構を確認した遺跡について取り上げて述べることとする。

第 1 図　野々市市位置図



第 2 図　周辺の遺跡

1/10000
0　100　200　300　400　500m

古代北陸道の遺構が発掘調査によって検出された遺跡としては、野々市市内では三日市 A 遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、徳用チャヤ遺跡があり、他に稲荷ウラドマリ遺跡の確認調査の際にみつかっている。特に三日市 A 遺跡では 2 条の並行する溝が 150m にわたってみつかっており（第 5・10 次調査）、道路幅は側溝の芯々距離で 8m を測る。また三日市 A 遺跡では駅家の可能性が指摘されている大型の掘立柱建物がみつかっている（第 19 次調査）。古代北陸道に比定される遺構がみつかっている遺跡としては、野々市市より北では金沢市観法寺遺跡や津幡町加茂遺跡等がある。

No	遺　跡　名	時　代
①	徳用チャヤ遺跡	古代・中世
②	徳用クヤダ遺跡	弥生・古代・中世
③	三日市 A 遺跡	縄文・弥生・古代・中世
④	郷クボタ遺跡	弥生・古代・中世
⑤	二日市イシバチ遺跡	縄文～古墳
⑥	野代オバナヤシキ遺跡	
⑦	三日市ヒガシタンボ遺跡	弥生・古代・中世・近世
⑧	稲荷シチタン遺跡	古代
⑨	稲荷ウラドマリ遺跡	古代
⑩	稲荷シマ遺跡	
⑪	稲荷マタベエタ遺跡	

第 3 章 遺構と遺物

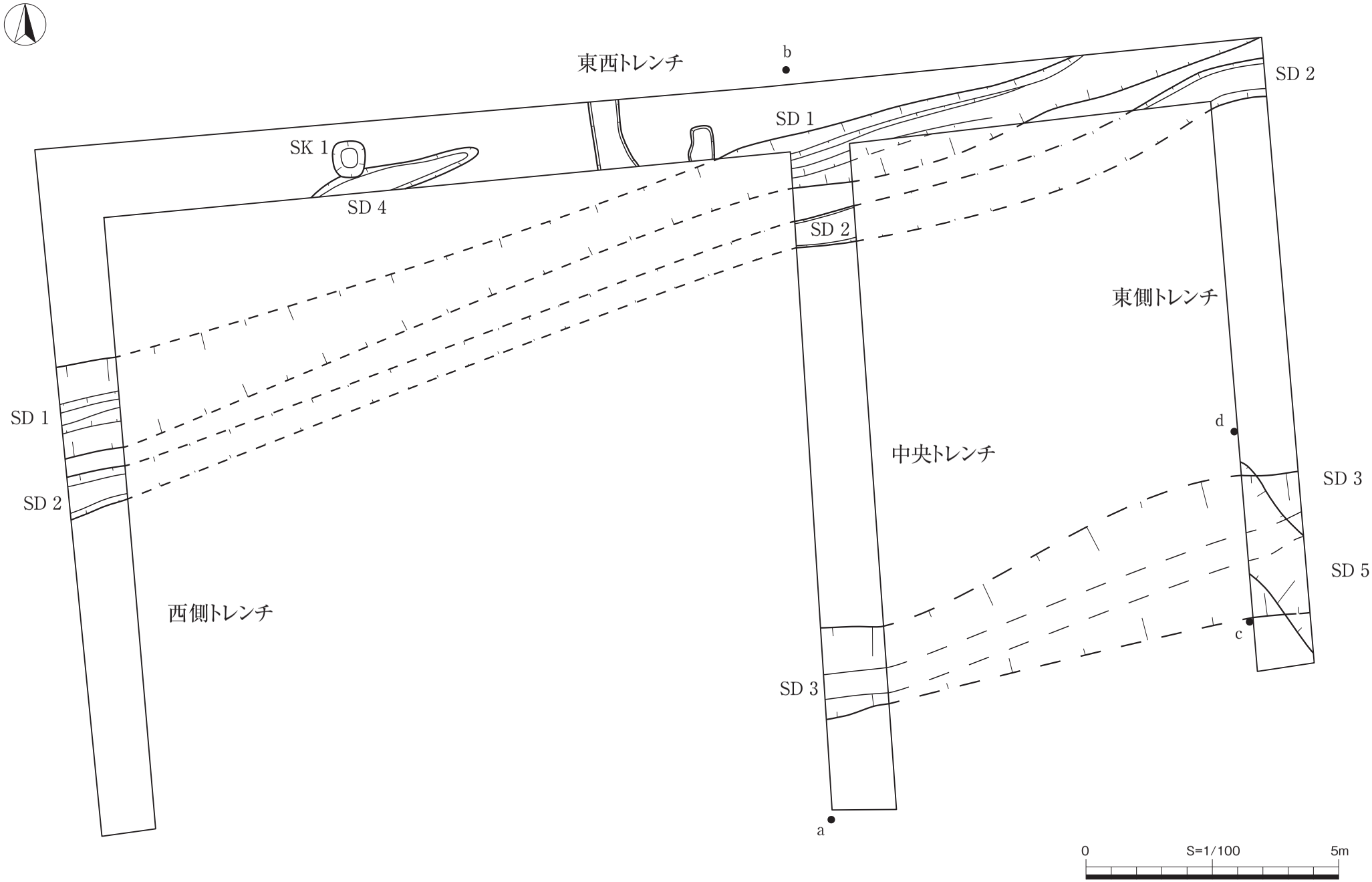
検出した遺構は溝 5 条、土坑 1 基である。

溝 SD1

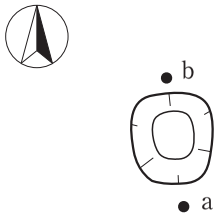
（検出）調査区西側トレンチ及び東西トレンチで検出した。分布調査時に検出した道路側溝と推定される溝であり、調査区西側では SD2 と重なり合う。平面検出では前後関係を十分に判定できなかった。（覆土）暗褐色土の単一層とした。ブロック土の混じりはわずかである。（規模）検出できた範囲で幅 1m から 1.8m ほどの溝である。検出面からの深さは約 70cm で、中段をもち底部が平坦な逆台形状となる。東から北へ 20 度触れる方向に延びる。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期を決定づける根拠はない。SD3 と対となる古代北陸道の側溝と推定され、SD2 を切ることから補修後のものと考えられる。

SD2

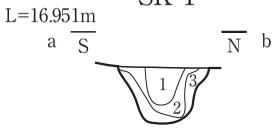
（検出）西側トレンチ及び中央トレンチで検出した。分布調査時に検出した道路側溝と推定される溝である。



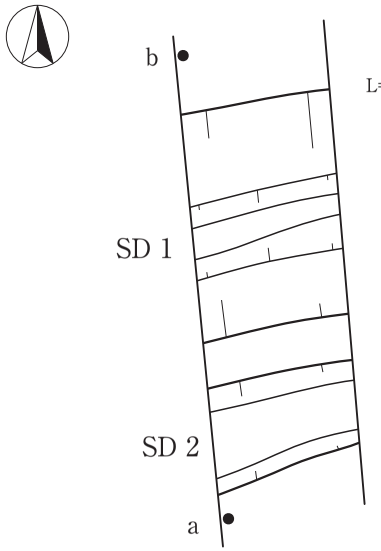
第 3 図　調査区全体図(S=1/100)

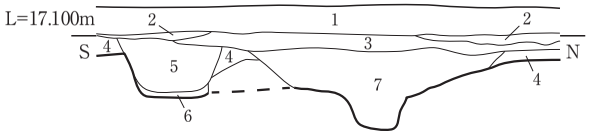


SK 1



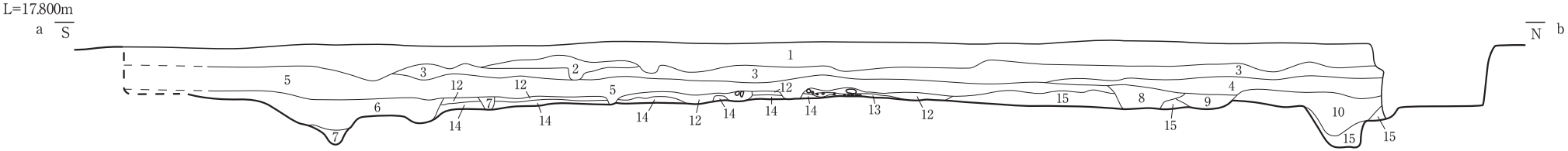
1. 暗褐色砂質シルト　地山土質ブロック 10%混じる
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土　地山土ブロック 3%混じる





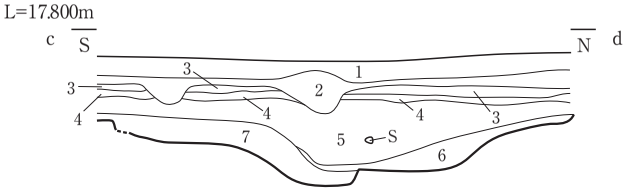
1. 耕土
2. 床土
3. 包含層　暗褐色土
4. SD 2　暗褐色土　地山ブロックφ1cm 少量混じる
5. SD 2　黒褐色土
6. SD 2　暗褐色土　地山土ブロックφ10cm30%混じる
7. SD 1　暗褐色土
8. 包含層　暗褐色土　地山土混在する
9. 地山　にぶい黄褐色土

中央壁

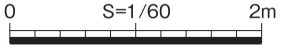


1. 耕土
2. 床土
3. 包含層 1　暗褐色砂質シルト
4. 包含層 1　黒褐色砂質シルト　やや粘性強い
5. 包含層 2　黒褐色砂質シルト　やや粘性強い
6. SD 3　暗褐色砂質シルト　φ1 ～ 3cm 程の礫少量混じる
7. SD 3　暗褐色砂質シルト　地山ブロック 1%混じる
8. 暗褐色砂質シルト　地山土混在する
9. SD 2　暗褐色砂質シルト　φ10cm 程のブロック 1%混じる
10. SD 1　暗褐色砂質シルト
11. SD 1　暗褐色砂質シルト　地山ブロック 1%含む
12. 硬化面　暗褐色砂質シルト　φ10 ～ 30cm 程の礫多量に含む
13. 硬化面　暗褐色砂質シルト　13 層より地山土多く混じる　φ3 ～ 10cm 程の礫多量に含む
14. 硬化面　暗褐色砂質シルト　13 層より地山土多く混じる　φ3 ～ 10cm 程の礫少量含む
15. 地山　にぶい黄褐色砂質シルト

調査区東側 SD



1. 耕土
2. 床土
3. 床土
4. 床土
5. SD 5　黒褐色砂質シルト
6. SD 5　黒褐色砂質シルト　ブロック土含む
7. SD 3　暗褐色砂質シルト



第 4 図　個別遺構図(S=1/60)

（覆土）西側トレンチの 4 層から 6 層が該当する。4 層が堆積したのちに掘り返され、5 層及び 6 層が堆積したものと考えらえる。ブロック土の混じりはわずかである。（規模）検出できた範囲で幅 85㎝から 180cm ほどの溝である。調査区西側では検出面からの深さは約 60cm で、底部が平坦な逆台形状となる。調査区中央トレンチでは 20cm 程度の掘込の浅い溝として検出した。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期を決定づける根拠はない。SD3 と対となる古代北陸道の側溝と推定され、SD1 を切る補修前のものと考えられる。

SD3

（検出）調査区中央トレンチ及び東側トレンチで検出した。東側トレンチでは SD5 と重なり合い、SD5 が切る。SD5 とは色調が異なり切られることは容易に判断できたが、SD3 の幅を平面検出では判断しえなかった。（覆土）中央トレンチ 7 層が該当する。6 層は道路の硬化面を切るものであり、不整形であるが側溝を補修した可能性が考えられる。（規模）検出できた範囲で幅 180cm ほどの溝である。調査区西側では検出面からの深さは約 60cm で、東側トレンチでは中段を持つ SD1 と類似する形状を確認した。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期を決定づける根拠はない。SD1 及び SD2 と対となる古代北陸道の側溝と推定される。

SD4

（検出）東西トレンチ西側で検出した。平面精査の結果 SK1 に切られると判定した。東端は溝が途切れる。（覆土）暗褐色土の単層である。（規模）幅約 50cm、深さ 20cm 程を測る。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期及び性格は不明である。

SD5

（検出）東側トレンチで検出した。SD3 を切るものである。（覆土）東側トレンチの 5 層及び 6 層が該当する。黒褐色土であり、ブロック土の混じりは少ない。（規模）幅約 130cm、深さ約 60cm を測る。底部が平坦な逆台形状となる。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期及び性格は不明である。

土坑 SK1

（検出）SD4 を切る土坑で、平面検出時に色調の違いから SD4 と明確に識別できた。（覆土）中央に柱を抜き取ったと考えられるブロック土を多く含む 1 層を確認した。（規模）長軸 70cm、短軸 64cm 程の隅丸方形状である。深さは約 44cm である。（遺物）遺物は出土しなかった。（時期・性格）時期を特定するものはない。形状から古代以降の柱穴と考えられるが、組み合うものは検出できなかった。

道路遺構

SD1 及び SD2 と SD3 は道路の側溝と考えられ、中央トレンチでこの道路に伴う硬化面を検出した。硬化面は 1cm から拳大ほどの礫が混ぜられ硬化していた。SD1 と SD3 の芯々距離でおおよそ 10m を測る。

第 4 章 総括

本遺跡は古代北陸道の推定経路上に位置しており、その側溝と考えられる溝を検出した。三日市 A 遺跡の第 9・10 次調査でも周辺で同じ古代北陸道の側溝を検出しており、ここで若干比較を行う。三日市 A 遺跡でみつかった道路遺構は、道路の路面幅で 8m を測り、稲荷シチタン遺跡の SD2 と SD3 の路面幅とほぼ一致する。三日市 A 遺跡の溝は逆台形状であり、北側の側溝は 2 条以上が並行しており補修がなされたと思われる点も一致する。また、いずれの遺構からも遺物が皆無であり、道路を頻繁に清掃し維持管理された結果と考えると、稲荷シチタン遺跡でみつかった道路遺構についても、古代北陸道と考えてよいものと判断できよう。

今後さらに東側の経路をたどることが期待されるが、近接する稲荷ウラドマリ遺跡より東では、推定経路上の分布調査を実施するものの遺構を確認できていない。若干経路が振れていることが予想されるため、今後の適切な保護のためより一層注意を払う必要がある。

西側トレンチSD1・2 完掘

中央トレンチSD1・2 断面（北東から）

東西トレンチSD1 完掘（東から）

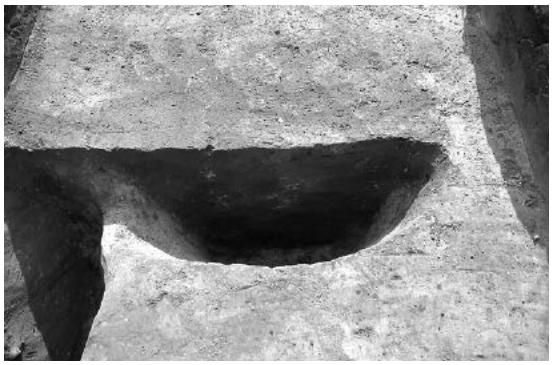
中央トレンチSD3 完掘（南から）

中央トレンチSD3 完掘（南東から）

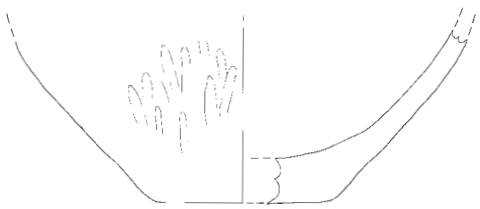
東側トレンチSD3・6 検出（北東から）

中央トレンチSD4、SK1 完掘（北から）

中央トレンチ硬化面断ち割り（東から）


中央トレンチSK1 断面（東から）

調査区全景（北東から）人が立つ位置が道路側溝



1

1

0　S=1/3　10cm

第 5 図　遺物実測図、遺物写真(S=1/3)

第 1 表 土器観察表

報告番号	遺構	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	底径(㎜)	調整(外)	色調(外)	残存率	備考	実測番号
						調整(内)	色調(内)			
1	遺構検出	土師器			64	ナデ・ミガキ	明赤褐	底部 1/4		1
		壺か				ナデ	明黄褐			

報　告　書　抄　録

ふりがな	いなりしちたんいせき
書名	稲荷シチタン遺跡
編著者名	腰地　孝大
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県野々市市三納一丁目 1 番地　　Tel：076－227－6122
発行機関	野々市市教育委員会
発行年月日	西暦　2019 年 3 月 15 日

所収遺跡名(フリガナ)	所在地(フリガナ)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
稲荷シチタン遺跡(イナリシチタンイセキ)	石川県(イシカワケン) 野々市市(ノノイチシ) 稲荷二丁目(イナリニチョウメ)	172120	1207600	36° 32′ 09″	136° 36′ 02″	2018年 6月25日 ～ 6月27日	73	放課後児童クラブ建設
	種　別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
	集落	古代		溝（道路遺構）土坑		土師器		
要　約	古代北陸道推定経路上に位置し、南西―北東方向に延びる道路遺構に伴う南北両端の側溝及び硬化面を検出した。							

2019 年 3 月 15 日　発行

稲荷シチタン遺跡

著作権所有　石川県野々市市三納一丁目 1 番地
発　行　者　野々市市教育委員会
印　刷　者　石川県野々市市矢作三丁目 18
高桑美術印刷株式会社